

トリコデルマ アトロビリデ水和剤 エコホープ	取扱メーカー： クミカ 原体メーカー： クミカ
成分： トリコデルマ アトロビリデ SKT-1…………… 1×10^8 cfu/ <i>ml</i>	性状： 暗褐色水性和性懸濁液体 毒性： 普通物 消除法： ——

【品目特性】 ……………

●微生物（非病原性糸状菌）を有効成分とする水稻種子伝染性病害防除剤であり、特別栽培農産物において使用成分回数にカウントされない。

●水稻育苗期の主要病害であるばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病等に対し防除効果を有する。

●有効成分である非病原性糸状菌が稲種粒上で増殖し、ばか苗病菌やいもち病菌などの病原性糸状菌、もみ枯細菌病や苗立枯細菌病などの細菌の増殖を抑制することでこれらの病害を防除する。また、ばか苗病菌に対しては病原菌の細胞壁を溶かす溶菌作用があることも確認されている。

●人畜、魚及び有用昆虫、天敵類に対する感染性、稲を含むトマト、なす等ほとんどの作物に対する病原性も認められていない。また、土壌中や河川水中では速やかに死滅し、環境に対しても極めて負荷が少ない薬剤である。

●胞子を水に懸濁させた製剤なので、薬液の調製が容易で安全である。また、廃液処理も従来の化学合成農薬に比べ極めて簡便である。

●有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】 ……………

●浸種前から催芽時に、24時間種子浸漬処理を行う。催芽～出芽時に適正な温度管理によりもみに付着したエコホープ菌を増殖させることが効果発現のポイントである。

●浸漬処理時

○浴比（種もみと薬液の容量比）1：1以上で、目の粗い網布などに入れ、よくゆすって気泡を除き、エコホープ菌をまんべんなく付着させる。

○薬液温度は10℃以下、30℃以上をさける。

○処理後は風乾せず、直ちに浸種を行う。

●浸種時

○浴比1：2以上、停滞水中で行う。

○水換えは必要に応じて静かに行う。

○水温は10℃以下、30℃以上をさける。

●催芽時

○温度25℃～32℃で行う（水中催芽、水切催芽とも可）。

●は種～緑化

○水はけの悪い培土はさけ、出芽時に過湿にならないように注意する。

○出芽は25℃～32℃で行う（35℃以上はさける）。

●エコホープ処理後は作業を連続して行い、芽止めやもみの乾燥等胞子に悪影響を及ぼす条件にならないように注意する。

●温湯消毒済もみにも使用できる。

●製品は10℃以下の冷暗所で、密封して保管する。但し凍結させない。

●有効期限内に使用する（製造後8カ月以内）。

【薬効・薬害等の注意】 ……………

●使用前に容器をよく振って均一な状態にしてから、所定薬液を調製する。

●有効成分は生菌であるため、入手後できるだけ早く使用する。開封後は全て使いきる。

●苗立枯病（リゾープス菌を除く）には効果がなないので、苗立枯病防除剤を併用するか、適正な育苗管理を行う。

●ベノミル含有剤、チオファネートメチル含有剤及びEBI剤との混用又は、は種時処理との体系使用では効果を低下させるのでさける。

●出芽後に種もみの表面及び培土の表面に白色～

緑色の菌叢が生じる場合があるが、その後の苗の生育には影響はない。

●微生物汚染度の高いもみでは効果の劣ることがあるので、塩水選等でもみを選別し適正な育苗管理・温度管理を行う。

●きのこの菌類の作物に対して影響を及ぼすおそれがあるので、きのこ等に絶対にかからないようにする。使用前にきのこ等への安全対策につい

て、関係指導機関と十分に協議し、きのこ等への安全対策に留意して使用する。

【安全対策上の注意】



【適用と使用法】

作物名	適用病害名	希釈 倍数	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	トリコデルマ アトロピリ デを含む農薬の総使用回数
稲	ばか苗病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 いもち病 苗立枯病 (リゾーブス菌) ごま葉枯病	200 倍	浸種前～催芽前	—	24～48時間 種子浸漬	—
	催芽時		24時間 種子浸漬			
	稲 (箱育苗)		もみ枯細菌病		は種時覆土前	
ばか苗病		50 倍	育苗箱＊ 1 箱当り 100 ml を散布			

* 育苗箱は30×60×3 cm、使用土壌約5 ℓ